

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

2.

肉筆マンガ同人誌
つれづれ草とマンガ友だち



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日（金）から29日（日）の会期で開催しました、新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやまじたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

おやじマンガ同人誌
 LINTUREKUKEGURA
マンガ展
 マンガと生きた50年
 篠原幸雄からやまじたゆきおへ



おやじマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者とその立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきたそして今再び、やまとしたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料

日時：10月20日（金）～10月29日（日）午前9時より午後5時まで（最終日は午後5時まで）

会場：森下文化センター1F展示ロビー

お問合せ：森下文化センター

〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17
 TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677
 都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出入口より徒歩6分
 都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅C2出入口より徒歩6分
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター





2、肉筆マンガ同人誌 つれづれ草とマンガ友だち

中学の頃マンガ好きな友達、FさんとKさんもできました。そのときのマンガ友達三人で作ったマンガ同人誌が「つれづれ草」です。

その少しあとに広島にいた「新宅よしみつさん」と知り合ったんです。彼は、Kさんと文通仲間だったことからこのマンガ同人誌「つれづれ草」に参加するようになりました。

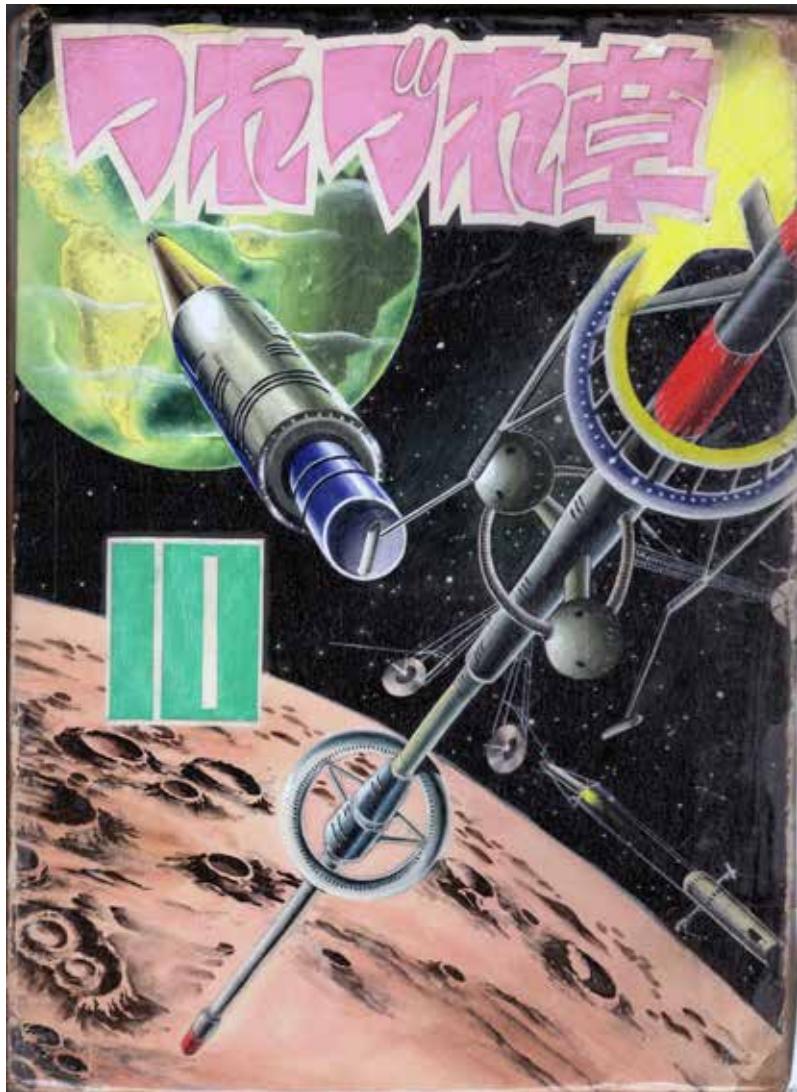


中学生の時、マンガ友達三人で作った肉筆マンガ同人誌
「つれづれ草」1号2号の表紙

文・新つれづれ草第7号掲載
「つれづれインタビュー マンガびと」より抜粋 加筆

その新宅さんが自分の文通仲間に声をかけてくれて、全国からメンバーが集まってきたんですね。大和田夏希さん、福田達雄さん、おだ辰夫さん、高岡凡太郎さん、かたおか徹治さん、風忍さん、若崎健一さん……。

現存する唯一の肉筆マンガ同人誌「つれづれ草第10号」
昭和44年2月1日発行



新宅さんが合流し、3号から全国からマンガ仲間が集まつた。本格的な
マンガ同人誌ができる用になり、大きさもB4判で分厚い立派な同人誌
が出来あがつた。

新宅さんは高校を中退して上京し、漫画家のアシスタントになつたこともあり、つれづれ草の仲間は新宅氏を「ボス」と慕つようになり、「つれづれ草」は、彼を中心活動する様になりました。そして、「COCOMO」で紹介されたり、新宿にあつたマンガ喫茶「コボタン」で展示会をやつたりしていました。

田口えりおさんが参加してきたのもそれくらいの時期でしたね。

マンガの仲間が一気に増えたといつか。僕は自分でもマンガを載せていたけれど、みんなの原稿を集めて綴じたりするまとめ役をしていて、それはそれで楽しかったのを覚えています。



つれづれ草第10号に掲載された作品の一部

肉筆同人誌といつ原始的な物でした
が、原稿をまとめて本にするという、
編集の原点の様な経験をできたのは、
私のその後の生き方に大きな影響を与
えたのだと思います。

文・新つれづれ草第7号掲載
「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆



新宿のマンガ喫茶「コボタン」と マンガ雑誌「COM」

高校生になると、毎週週末には新宿のマンガ喫茶「コボタン」に行く様になつた。

コボタンの存在を知つたのは、マンガ雑誌COMの小さな広告が地図付きで掲載されていたのを見たからだつた。

新宿駅東口を出て、紀伊国屋書店を過ぎ、伊勢丹を過ぎ、画材の世界堂の先、新宿御苑の近くまで行くと、今の地下鉄新宿三丁目の駅当たりに「マンガ喫茶コボタン」はあつた。

小さな入口を入れると1階はカウンター席だけの小さな店で、なんだか怪しげな人たちで席は一杯で、ボクはすぐに入口脇にある小さな階段を登つて2階に上がる。今のマンガ喫茶とは違

い、マンガ本が読み放題というのではなく、マンガ雑誌COMに掲載された作品のマンガ原稿などが壁に貼つてあり、原画展をやつしているので、ここがマンガ喫茶と分かる程度の店だつた。ただ他の喫茶店と違う所は、実際のマンガ雑誌の編集者とマンガ家がここで打ち合わせをしていたり、ボクの様なマンガ家志望の少年たちが集まつてきていたりしていて、なんだか特別な空間だつたことは確かだつた。

人見知りのボクは、コボタンに行つても他の客に積極的に話しかけるわけでもなく、ただその不思議な空間の中に入ることに満足して浸つていたのかも知れない。

同人誌「つれづれ草」が雑誌COMの同人誌

特集に取り上げられたことで、同じ同人誌の「墨汁三滴」と合同マンガ原画展をコボタンでやることが出来たり。その後大変お世話になる少年ジャンプの編集者の角南さん（当時は集英社の

マンガ月刊誌「少年ブック」の新人編集者だった）に出会ったのもこの、コボタンでした。

コボタンで角南さんから名刺を頂いたボクはすぐこの気になつて、神保町にある集英社の少年ブック編集部まで、自分のマンガ原稿を見

てもうじに行きました。読者コーナーの担当

だつた角南さんは、カットではなく、見出しを描くレタリングの仕事を発注してくれました。（ボクの絵は下手くそで、とても使い物になりなかつたのだと思います）

何にも知らない、ただただマンガを描くことが好きなマンガ少年と、新人マンガ家发掘担当の新人マンガ編集者の角南さんとの戦いがここから始まつたのだと思います。



COMの付録「ぐらこん」の同人誌特集で「つれづれ草」が紹介され、新宅さんの作品「逃がしの報酬」も掲載された。